

高齢者のライフ・レビューに関する研究

—— 家族生活過程の心理学的検討 ——

The Life Review in the Elderly: A Psychological Examination of their Family Life Processes.

星野 和実

【要 約】 The purpose of this study was to review the lives of the elderly. For following reasons; ①to analyze how to estimate their family life event, ②to clarify types of the family life-cycle by way of their cognition of the crises in their family life processes. Subjects were 48 elderly at home (male:39, female:9, 66~79 years old). Family life processes involved their marriage, the birth of their first child, the marriage of their children, and the birth of their grandchildren.

Although many older people have experienced crises on the occasion of their marriages and the marriages of their children, they were less than 50% of subjects. Four family life-cycle types were found; The realizing type, the emphasis on family formation type, the emphasis on family reconstruction type, and the medium type.

【キーワード】 Elderly, Life review, Family life process

I. 問題と目的

1. 現代日本における家族の歴史的推移

家族とは「居住共同に基づいて形成された親族集団…(中略)…夫婦(親), 子の結合を原型とする, 感情的包絡 (emotional involvement) で結ばれた, 第一的な福祉志向集団である」とされる (森岡・塩原・本間, 1993, Pp.177)¹⁾. 現代の家族は核家族, 三世代家族, 離婚・再婚による二重核家族等の様々な形態を取り, また結婚を選択せず同棲や独身ですごす人々もあるが, 多様な家族に即した研究は未開拓である.

家族も歴史的, 文化的影響を受けるとされる. ライフサイクルの推移を見ると, わが国では近年平均寿命が伸長するとともに, 高齢化が急速に進展し, 一方で高学歴化, 晩婚化に伴って少子化が顕著になった. 従って子の養育期間は短縮され, 向老期から老年期には定

年退職後の期間や老親の扶養期間が延長され, 子独立後の夫婦生活や祖父母役割が拡大した.

厚生白書 (1998)²⁾によると, 家族類型別一般世帯数で核家族世帯割合は1960年に53.0%であったが, 1980年に60.3%となった以降は漸減した. “1970年代前半までの核家族世帯の大幅な増加は, 主に, 1925年頃から1950年頃までの多産少死の時期に生まれ, 兄弟姉妹が4~5人いるいわゆる人口転換期世代が, 親を同居扶養する長男を実家に残し, 都市部に職を求めて流入し, そこで結婚し家族を形成することによりもたらされたものである”(厚生白書, 1998, Pp.46)²⁾. また, 核家族世帯の内訳は夫婦と子どもからなる世帯は減少し, 夫婦のみの世帯が増加した. 一方, 単独世帯は増加の一途を辿っている. その内訳は, 1995年では未婚単身者世帯が61.3%, 配偶者との死別者世帯が19.6%であり, 後者のうち高齢単身者世帯は14.7%と増加を

示した。

戦後の核家族の代表とされた夫婦と子どもという形態は減少し、夫婦のみの世帯が多くなり、しかも高齢夫婦世帯が増加した。合わせて、未婚者及び高齢者の単身世帯も高率を占める。ひとり暮らしは例外的なものではなく、むしろ現代社会の生活形態として存在している。今後は、未婚者の共同生活や高齢者のグループ・ホーム等、血縁や姻戚関係に依らない「家族」のあり方が予想される。

2. 家族のライフサイクル研究の展望

1) 家族のライフサイクル研究の黎明

そもそもライフサイクルとは出生から死までの成熟による生命現象を指し、そこでは一定の段階を有し次代への継承を含むという (O'Rand & Kreckler, 1990)³⁾。森岡 (1993)⁴⁾によると、これを生活現象として翻案し、個人の生活の場を家庭に位置づけて、夫婦の成立と子の発達に伴う変化を見出し、家族のライフサイクルとする立場が示された。

Hill & Matesich (1979) は家族周期理論と人間発達論を起源とする家族発達研究枠組みの系譜を示した。中でも、家族周期理論においてRowntree (1901)⁵⁾ は19世紀末のイギリスで労働者の生涯に渡る経済生活過程をまとめ、総収入が家族の身体的生存を保持する最小限度ラインを第一次貧困線としてその上下変動を描いた。5歳から15歳は第一次貧困線を下回るが、労働市場へ参入する15歳から結婚数年後まではプラスに転ずる。30歳から40歳はマイナスになり、子どもが働き収入を得る時期から子が結婚し別居する60歳まではプラスを維持する。しかし、労働能力を失う65歳以上では再下降するとした。

Sorokin, Zimmerman, & Galpin (1931)⁶⁾ は、アメリカの農場で生活する家族について、家族構成、農場面積、生活水準をもとに家族のライフサイクルを提示した。第1段階は夫婦2人世帯で収入は夫婦ともに労働力となるため十分である。第2段階は夫婦と1人以上の子どもがあり、子育てのために働くが節約する必要が大きい経済的には最も厳しい。第3段階は子どものうち1人以上は自活しており、全家族員が労働力となるため最も余裕がある。第4段階は子が結婚し独立した後の老夫婦世帯であり、夫婦は労働できなくなり子に扶養されて経済的に苦しくなるという。ここでは子の発達と夫婦の加齢を軸として、それらを労

働力と見なし、家族の経済生活を対応させて、家族周期とした。

2) 家族のライフサイクル段階に関する研究

前述したRowntree (1901)⁵⁾ は一定年数の間隔で着目した側面の時間的経過を追跡したが、Sorokin, Zimmerman, & Galpin (1931)⁶⁾ は漸次的推移よりも段階を設定した。その後、特有な家族の発達課題をもつ段階が提示される中で (Hill; 1970, 森岡; 1973, 1977, 前原: 1996, et, al.)^{7) 8) 9) 10)}、望月 (1980)¹¹⁾ は家族のライフサイクル段階を7つに分類し、基本的発達課題を掲げた。次にこれに沿って見ていく。

(1) 婚前期

婚前期は身体的、社会的、心理的成熟を達成し、経済的自立を準備し性役割を調整することが求められる。Lewis (1973)¹²⁾、Adams (1979)¹³⁾ の配偶者選択過程モデルでは、出会いから結婚に至るプロセスの最終局面で、パートナーとしての二者関係の形成及びコミットメントを挙げた。また、古畑 (1993)¹⁴⁾ によると長期的な親密な異性関係は生理的、性的な喚起のみでなく、相互に率直に自己開示し合い、相手を受け入れることや、全人的に尊重し合いつつ愛情を育むことにより形成されるという。恋愛関係から夫婦関係への移行では関係性の吟味と確認を繰り返しながら、具体的な共同生活のプランや夫婦役割をお互いに提起し合うと考えられる。

(2) 新婚期

新婚期は子どもの誕生までであり、夫婦間の役割分担、性生活への適応、自立した夫婦生活の確立が必要とされる。Reedy, Birren, & Schaie (1981)¹⁵⁾ は成人前期 (平均年齢28歳)、成人中期 (平均年齢45歳)、成人後期 (平均年齢65歳) の夫婦関係で重視されるものとして、情緒的安心感、尊敬、コミュニケーション、援助・遊び、性的親密性、忠誠を取り上げ、成人前期ではコミュニケーションと性的親密性が高く、それ以降は情緒的安心感と忠誠が高いとした。このように、新婚期には短期的、長期的な展望から家族生活を構築するために、夫婦間で頻繁に話し合いが必要とされるとともに、性的適応と愛情の深化がなされると考えられる。

(3) 養育期

養育期は第1子の誕生から小学校入学までを指し、家族計画及び教育方針を立て夫婦役割と親役割の調和

が課題とされる。氏家(1996)¹⁶⁾は子の発達に対する親の変化過程は個人と環境の相互関係により生じ、出来事や要因間の連鎖反応として意味の変容を引き起こしながら、全体の変化を引き起こすトランザクションとして捉えた。それは個人が特定の出来事への選択的知覚を有し、目標設定と現実評価及び自己強化のパターンにかかわる“現実知覚＝評価様式”の変化と規定される。母親は出産後、目標と現実との不適合という問題に直面すると、子との相互作用を基軸にして、配偶者や家族、他の母親にも働きかけるとともに、子の発達を通して互いに新たな側面を見出しながら、“現実知覚＝評価様式”を変容させるといふ。このように、養育期には父母役割の獲得に伴って、仕事と家庭のバランスや夫婦役割を再調整しながら、子育ての方法を模索し、新たな構成員を加えた家族生活を創生するのであろう。

(4) 教育期

教育期は第1子の就学から青年期までで、子の発達に伴う親役割の修正や、妻の社会参加(地域、職場、余暇活動等)とともに、家族結合の吟味が求められる。門野(1995)¹⁷⁾によると、夫婦関係の満足には暗黙の了解に留まらず家事分担や生活方針の意見が一致しており、妻の就労について話し合うことが有意に関連するとした。しかし、30歳代から40歳代は夫婦間の話し合いが減少するという(藤原・石井・黒田・春日：1986, 藤原：1992)¹⁸⁾¹⁹⁾。また、Berry & Williams(1987)²⁰⁾は結婚生活の満足度は新婚期で最高だが漸減し、子が思春期の時期に最も低く、それ以降は上昇するとした。

子の成長に伴い親子関係の再編へ向けて親役割を問い直すとともに、職業生活では昇進の軋轢や職務責任の増大に直面することも推測される。しかし、夫婦間のコミュニケーションは不足しやすいために、結婚生活の満足度が顕著に低下すると考えられる。このように教育期には個々人が未来展望を描くと同時に、変容しつつある家族全体の繋がりが問われると考えられる。

(5) 排出期

排出期は子が青年期から独立するまでで、子の就職、結婚に伴って夫婦関係を再調整し、老後の見通しを立てることが課題である。平石(1995)²¹⁾は青年期の子は自己を問い独立に向う一方、親は成人期の発達課題に取り組むため、相互的に発達に関与し合うという。

また、子どもの巣立ちの際に親は子の世話から老親の世話へ移行することに気づく(Neugarten, 1976)²²⁾。Lewis(1990)²³⁾は親子間の援助関係の変容として、子が青年期までは親からの援助が多く、青年期には相互に援助が低下するが、成人前期には相互依存となり、成人後期には子から老親への援助が増大するとした。近年、親族関係の非対称性が指摘され、都市部のホワイトカラー層で妻方親族との結びつきが強い(前田・目黒, 1990)²⁴⁾。三谷(1991)²⁵⁾によると、訪問、通信、贈答、病気の世話等の援助行動は妻方親族優位であり、夫方親族優位は経済的援助に限られるという。

まとめると、成人期は独立した子どもと老親の中間的な位置にあり、両者への援助が要請されるとともに、相互の家族イベントや健康等の問題から、それぞれの関係が変動する時期である。各自のニードと資源に応じて依存関係が刻々と変容し続けるが、社会的背景としては家制度による親子関係よりも、関係性そのものを基盤とした娘—親関係への傾斜があると考えられる。

(6) 老年期

老年期は子どもが全員独立し、配偶者と死別するまでを指す。ここでは定年退職後の夫婦関係の形成、生活設計の再構築、祖父母役割への適応が求められる。宇都宮・岡本(1996)²⁶⁾は模索経験と関与の有無から、老年期夫婦の関係性ステイタスとして、関係性達成型、献身的関係性型、妥協的關係性型、関係性拡散型、表面的関係性型、独立的関係性型に類型化した。関係性達成型が最も多く、次いで表面的関係性型、妥協的關係性型の順であった。

また、孫が誕生した場合は新たに祖父母役割を付与される。Roberto(1990)²⁷⁾、Kivett(1991)²⁸⁾、詫摩(1991)²⁹⁾は祖父母と孫の関係が性別、年齢、居住形態、接触頻度、中間世代との関係等により規定されるとした。Kivnick(1982, 1983, 1986)³⁰⁾³¹⁾³²⁾は祖父母性(Grandparenthood)に①社会的役割、②家族関係、③現実の関係性(“寛容さ”, “年長者としての価値”), ④象徴的意味(“一族の連続性”, “過去への再関与”)を挙げた。一方、Kahana & Kahana(1970)³³⁾は孫であること(Grandchildhood)について、孫が流行を伝達したり交流することで祖父母は文化の変容と一貫性を考えたり、社会とのかかわりを保持するとした。

さらに、田畑・星野・佐藤・坪井・橋本・遠藤(1996)³⁴⁾は尺度作成から、孫・祖父母関係の機能を

見出した。孫から見た祖父母の機能、祖父母から見た孫の機能で共通して、“日常的情緒的援助”、“存在受容”、“時間的展望促進”、“世代継承性促進”の各機能が抽出された。祖父母から見た孫の機能では“道具的、情動的援助機能”も見出された。孫と祖父母は相互に過去や未来への時間的な見通しを促し、先祖からの家族の連続性を認識する機会を与え得ると言える。また、“存在受容”では何もしなくても相手がいるだけで安心したり、長期的に存在を支持する情緒的關係が提示された。しかし、亀口(1994)³⁹⁾は祖父母が家族内で権力をもち続けると成人期の子が親役割を担い難く、世代境界が不明確になるという。子育ての方針等で両親と祖父母で見解の相違が大きいと世代間葛藤も生じるであろう。

このように、老年期には職業生活に区切りをつけ、家庭や社会で自己を再定位することになる。また、子の独立後、夫婦関係を再評価したり、孫を迎えて新たな家族の世代間関係を形成すると考えられる。

(7) 孤老期

孤老期は配偶者との死別後、自身の死までの時期であり、一人暮らしの生活を構成したり、成人の子や友人関係の活用が必要とされる。河合(1997)³⁶⁾は近親死の中でも配偶者との死別が特に衝撃が強く、その影響として悲嘆、生活や経済の悪化、支えの喪失、心の孤影等を挙げた。また、高齢者におけるソーシャル・サポートの機能及び変容が検討される中で(Kahn & Antnucci:1980, Messeri, Silverstein, & Litwak:1993, Krause:1995)³⁷⁾³⁸⁾³⁹⁾、岡林・杉澤・矢富・中谷・高梨・深谷・柴田(1997)⁴⁰⁾は配偶者と死別した高齢者の精神的健康の維持に、生前よりも死別後の情緒的な社会的支援が有意な寄与を示すとした。高齢者単独世帯が増加する長寿社会で人生完成期を身体的、精神的に健やかに過ごすには自己の生きがいと、支えとなる対人的ネットワークが必要であると考えられる。

3. 家族のライフサイクル研究の問題点

Hill & Mattessich(1979)⁴¹⁾は家族がライフサイクルで漸進的な構造的分化と変容のプロセスを経験するとして、次のようにまとめた。家族発達は家族内部の力動に起因し、その変化は質的で非連続的であり、多方向性、普遍性をもつ。また、システムとしての家族は内部でまとまりつつ、外部集団からの影響も受ける半閉鎖的なものであるという。このように、家族発達

研究では家族員がそれぞれに発達課題をもち、子の発達につれて夫婦関係や役割を調整しながら、家族が構造的、質的に変容を遂げるという。しかし、家族発達について横断的研究でなく、追跡的な実証的検討は開発途上であると思われる。また、コーホートによる役割変化をめぐるタイム・スケジュールの相違について、細密な分析が十分でないと批判されてきた。

一方で、ライフコース研究は歴史的背景やコーホート差に着目してきた。ライフコース研究では個人の生活時間、家族時間、暦年の時間、歴史的時間の推移を分析レベルとして扱う。個人の生活時間は段階が連なっており、その中で役割が移行するが、家族の発達段階と必ずしも一致しない。社会的期待を反映し規範となる暦年の時間は歴史的な文脈により規定されるが、歴史的な文脈はある特定の社会的、政治的、文化的なできごとが発生し、特徴のある時期である歴史的な時間から構成される。近年、歴史的な文脈は家族のライフサイクルを変容させ時代差を引き起こしてきた。しかし、ライフコース研究は家族発達の個別性や成人期以降の人格発達との関連には関心を向けてこなかったとされる。

こうした中で、Elder(1974)⁴²⁾は家族発達を年齢に適切な役割遂行とライフ・イベントを経験する人生経路と見なし、個人のライフ・コースの相互作用を通して家族を捉える視点を提示した。合わせて歴史的背景に着目し、コーホート独自の発達過程を明らかにした。このように、歴史的な文脈からのコーホートに関する考察を組み込むとともに、ライフコース研究と家族発達過程を統合することが必要であると考えられる。

4. 本研究における問題と目的

家族のライフサイクル研究では子どもの成長に伴う家族の発達段階と発達課題を設定した(Hill & Mattessich, 1979)。ここでは子どもが展開軸であり、親あるいは成人の側から家族のライフサイクルを理解する視点は不十分であると考えられる。また、それが成人期以降の生涯発達でプロセスとして捉えられた実証的研究は多くないと言える。

本研究の基本的な立場は家族発達に依拠しつつ、そのプロセスにおける個人差も重視するものである。そこで、成人前期から老年期までの家族生活過程で高齢者のライフ・レビューを通して、家族イベントにおけるクライシス(Erikson, 1950, 1964, et, al.)⁴³⁾⁴⁴⁾の有無や意味を明らかにするとともに、高齢者から見た家族

生活過程を分析する。本研究でクライシスとは、個人に意味ある出来事に際して意思決定の葛藤や模索経験及び、人生の変わり目としての認識と定義する。

II. 方 法

1. 対象者及び手続き

対象者はA県内の高年大学、生涯教育センターで学ぶ在宅高齢者48名（男性39名、女性9名、66歳～79歳）である。教育歴は中卒（尋常小学校高等科卒等）10名、高卒（旧制中学校卒、高等女学校卒等）24名、大卒（旧専門学校卒等）14名であった。最長職は労働者23名、自営業7名、管理職13名、知的専門職5名であった。居住形態は独居3名、夫婦2人同居27名、三世代同居6名、その他12名であった。

対象者に対して1996年2月～7月に筆者が個別に半構造化面接を実施した。面接場所は対象者の自宅、B市生涯教育センターあるいはC大学の面接室であった。

2. 面接の質問内容

対象者は人生を回顧し、筆者は岡本（1994）⁴⁵⁾、堀内（1993）⁴⁶⁾等を参考に(1)青年期から成人前期の①結婚、②第1子の誕生、(1)成人後期から老年期の①子の結婚、②孫の誕生、③配偶者の死別を質問した。ただし配偶者の死別は該当者が少なく分析から除外した。

3. 回答の評定

家族生活における上記の事項について、クライシスの有無を評定した。評定は面接の逐語記録から2名の評定者（そのうち1名は筆者）が実施し、評定の一致率は73.0～97.0%であった。

III. 結 果

1. 性、年代、最長職の職種による比較

家族生活過程でクライシス経験者は結婚と子の結婚で多かったが、対象者の50%未満であった（表1）。次に結婚、子の誕生、子の結婚、孫の誕生で、性、年代、最長職の職種（労働者・自営業と管理職・知的専門職）で、クライシスの有無について χ^2 検定を行った結果、有意差は見られなかった。ただし、孫の誕生はクライシス経験者が男性で（分析対象者32名中）15名、女性で（分析対象者7名中）0名であり、直接確率法を行った結果、5%水準で有意差が認められた。

従来の家族周期研究から鑑みると性別による分析が望まれるが、本研究では女性の対象者が少数であり困難である。また、彼女らは成人期に最長職に就き、男性と同様に職業生活と家族生活を併せ持つため、以下では一括して分析した。

2. 家族生活過程における内容分析

1) 青年期から成人前期における結婚と子の誕生

内容分析を見ると、結婚ではクライシス経験者は選択の迷い（7名、14.6%）、積極的なアプローチ（7名、14.6%）、外的要請との葛藤（5名、10.4%）が多かった（表2）。クライシス未経験者では周囲の勧め（8名、16.7%）、意志のなさ（2名、4.2%）が散見された。

子の誕生ではクライシスありで親としての認識（7名、14.9%）、責任感（5名、10.6%）が見られた（表3）。クライシスなしでは誕生の喜び（13名、27.7%）、感慨なし（6名、12.8%）、仕事重視（4名、8.5%）がうかがえた。

2) 成人後期から老年期の子の結婚と孫の誕生

子の結婚では出立の寂しさ（8名、17.4%）、家の問題（6名、13.0%）、親役割の変容（4名、8.7%）、子の発達評価（2名、4.3%）が認められた（表4）。クライシスなしでは独立の歓迎（6名、13.0%）、安堵感（3名、6.5%）の他に、重要でない（3名、6.5%）とする者もあった。

次に、孫の誕生でクライシスありは世代継承の認識（4名、10.5%）、祖父母役割への抵抗（4名、10.0%）、子との区別の意識（3名、7.5%）、子育てとの参照（2名、5.0%）が示された（表5）。クライシスなしは喜び（13名、32.5%）、感慨なし（6名、15.0%）が多かった。

3. 家族生活過程

ここでは、青年期から老年期までの家族生活過程における個人内傾向を検討した（表6）。ただし前述した全イベントの経験者を対象とした。(1)青年期から成人前期の結婚と子の誕生を家族形成期のイベントとしてまとめた。両イベント別で分析したが概ね同様の結果が得られたためである。(2)成人後期から老年期の子の結婚を家族再編期として取り上げた。孫の結婚も家族再編期に入るが、子の結婚と孫の誕生は前者が喪失的な側面、後者が獲得的な側面が強く、イベントの性質が異なるため個別に扱った。(1)(2)のクライシスの有無

により家族生活のライフサイクルを4タイプに分類した。形成重視型（9名）は(1)のみにクライシスがあり、結婚への展開を主導したり、子の誕生に親役割を認識した。再編重視型（6名）は(2)のみにクライシスがあり、子の結婚に子離れの困難さや寂しさを示す者が多

かった。中庸型（12名）は(1)(2)でクライシスがなく、自覚型（13名）は(1)(2)でクライシスが見られた。次に各型と孫の誕生との関連を検討した結果、孫の誕生でクライシスなしは形成重視型と中庸型で多かった。

表1 家族生活におけるクライシスの有無（人数） a)

家族生活	結 婚	第1子の誕生	子の結婚	孫の誕生	配偶者の死別
平均年齢（歳）	26.4	28.8	55.7	56.5	63.3
クライシスあり（%）	20(41.7)	15(31.9)	22(47.8)	15(37.5)	7(77.8)
クライシスなし（%）	28(58.3)	32(68.1)	24(52.2)	25(62.5)	2(22.2)
分析対象者	48	47	46	40	9

a) 各イベントの経験者を分析対象者とした。

表2 結婚におけるクライシスありの内容分析（人数） b)

内容	回答例	N (%)
1. 選択の迷い	・夫ともう1人からプロポーズされた（事例47）.	7 (14.6)
2. 積極的なアプローチ	・妻はもてた。私はどうしても結婚したかった。押しの一手で妻に接近した（事例9）.	7 (14.6)
3. 外的要請との葛藤	・30歳で結婚する予定だったが、母親の病気のために結婚した。結婚したくなかった（事例19）.	5 (10.4)
4. 家族のはじまり	・結婚すれば子ども生まれる。特に両親が早く死んでいるので、親もきょうだいもないから（事例25）.	3 (6.3)
5. 独立	・叔母は私にとっての第2の母…昭和〇年に結婚した。それで叔母から独立した（事例35）.	2 (4.2)
6. 節目の意識	・いちばん大きな節目だった。それまで自分が幸せと思ったことがなかった（事例37）.	2 (4.2)
クライシスあり／分析対象者		20／48

b) 複数の分類に重複する内容もあるため、合計は分析対象者数を超過する。

表3 第1子の誕生におけるクライシスありの内容分析（人数）

内容	回答例	N (%)
1. 親としての認識	・初めて母親になれると嬉しかった(事例43).	7 (14.9)
2. 責任感	・責任感を感じてしまって、嬉しいという感じはなかった(事例43).	5 (10.6)
3. 負担感	・夫が職を転々としていた頃だったから、あまり喜べなかった(事例27).	3 (6.4)
4. 誕生の苦勞	・お産の時、薬を飲んで陣痛が来たが、なかなか産まれなかった(事例47).	3 (6.4)
5. 節目の意識	・長男の生まれた時はありがたい節目だった(事例24).	1 (2.1)
クライシスあり／分析対象者数		15／47

表4 子の結婚におけるクライシスありの内容分析（人数）

内容	回答例	N (%)
1. 出立の寂しさ	・何だか寂しい。一家から出ていってしまう（事例26）。	8 (17.4)
2. 家の問題	・本当は養子を取りたかったがうまくいかず、3人（娘を）嫁に出した（事例13）。	6 (13.0)
3. 子離れの困難さ	・長女の結婚は反対だった。でも本人が行きたいと言うので仕方がない（事例14）。	5 (10.9)
4. 親役割の変容	・親の責任が半分終わった（事例23）。	4 (8.7)
5. 子の発達評価	・これで長男も一人前だと思った（事例25）。	2 (4.3)
6. 節目の意識	・1つの段階ということで嬉しかった（事例35）。	1 (2.2)
クライシスあり／分析対象者数		22／46

表5 孫の誕生におけるクライシスありの内容分析（人数）

内容	回答例	N (%)
1. 世代継承の認識	・血を引いた子ができた（事例50）。	4 (10.0)
2. 祖父母役割への抵抗	・最初は嫌だった。そんな年になったのかと思った（事例48）。	4 (10.0)
3. 拡大家族との葛藤	・外孫で、孫が「向うのおじいちゃんがいい」と言う。そう言われると心に垣根ができる（事例13）。	3 (7.5)
4. 子との区別の意識	・自分の子より孫の方が、可愛さは特別だと思った（事例23）。	3 (7.5)
5. 子育てとの参照	・子どもが生まれた時は、自分の仕事の方に比重が行っている。今は（孫を）余裕をもって見れる（事例7）。	2 (5.0)
6. 節目の意識	・やっとおじいちゃんになった。（同年代の人と比べて）全てが遅い（事例18）。	2 (5.0)
クライシスあり／分析対象者数		15／40

表6 家族生活のライフ・サイクル（N=40） c)

	タイプ		N (%)	孫の誕生の受けとめ	
	家族形成期 結婚・子の誕生	家族再編期 子の結婚		クライシスあり (N=15)	クライシスなし (N=25)
1. 形成重視型	○	×	9 (22.5)	1	8
2. 再編重視型	×	○	6 (15.0)	3	3
3. 中庸型	×	×	12 (30.0)	3	9
4. 自覚型	○	○	13 (32.5)	8	5

c) 本研究で扱った全ての家族イベント経験者を分析対象とした。

IV. 考 察

1. 成人期以降の家族のライフ・イベント

1) 結 婚

本対象者は1910年代から1920年代に誕生し、大正期から平成期を生きてきた。わが国では第一次、第二次世界大戦をはじめ幾つかの戦争を経て産業構造の変化のみならず、家族も直系家族から核家族中心へと変容した(森岡, 1993)⁴⁾。大友(1994)⁴⁷⁾は3世代調査で戦前の家本位の結婚から、戦後は見合い結婚中心だが個人の意志が配慮され、高度経済成長期以降に個人本位の結婚が主流になったとした。本対象者は大村(1994)⁴⁷⁾の第2世代に該当し、家制度から個人重視へ移行する途上で結婚を迎えた。結婚に際して周囲の勧めに依ったり、自分の意志を介さない者が多かった。

一方、クライシス経験者では選択の迷いや積極的なアプローチが多かった。Adams(1979)¹³⁾は肯定的影響と否定的影響の力動から配偶者選択の過程をモデル化した。最初の魅力の発生から親密感や自己開示が経験され、より深い魅力として容姿・人格・社会的属性の類似性及び、価値観・役割の一致、共感性が認識される。その間に社会的属性の顕著な異質性や非好意的な両親の介入、あるいは別の魅力的な他者の出現等、関係継続への障害も生じ得る。最終的にはペアとしての共同性が形成されて、関係解体に歯止めがかかり結婚に向かうという。本研究でも個人の希望に基づく接近行動や模索経験、関係性の吟味がうかがえた。

また、家族の病気、きょうだいの扶養、家の跡継ぎといった外的要請を受けて、本意でない結婚に応じた葛藤も見られた。こうした対象者は結婚について個人的な意志はもっており、他者の希望に無批判に沿ってはいないと思われる。当時、結婚は個人よりも家のつながりが優先され、それ故に確執や諦念が推測される。さらに、結婚を家族の始まりと認識したり、独立や節目として意識する者もあり、養育された原家族から離れ、自らの家族を形成しようという認識が見て取れる。

2) 子どもの誕生

子の誕生はクライシス未経験者が多かった。時代的背景から考えると1950年代から1960年代は戦後の経済復興期であり、子よりも仕事重視の声が聞かれた。また、親の実感や誕生に対する感慨のない者もあり、子の誕生を自身の発達に関連づけない者が存在すると言

える。柏木・若松(1994)⁴⁸⁾によると、父親及び母親の性役割観は父親の育児・家事参加や母親の有職と関連するという。対象者の性役割観によっても、子の誕生の認識やその後の子育てへの関与は異なると考えられる。

一方、クライシス経験者では親としての認識や責任感、負担感等が認識された。小野寺・青木・小山(1998)⁴⁹⁾は父親になる意識として制約感、人間的成長・分身感、生まれてくる子どもの心配・不安、父親になる実感・心の準備、父親になる喜び、父親になる自信の6因子を抽出した。このように親役割の楽しみがある一方で、子を保護する重責や家族に対する経済的な責任を感じ、それが負担にもつながることがうかがえた。

3) 子どもの結婚

本研究で扱った家族イベントの中で、子の結婚が最もクライシス経験者が多かった。出立の寂しさや子離れの困難さが見られ、親が子を保護する関係から相互依存へ、あるいは家族をもつ成人どうしの親子関係への移行にあたり戸惑いと緊張が認められた。また、大日向(1988)⁵⁰⁾は親としての発達は具体的な子とのかかわりから展開するとし、堀内(1993)⁴⁶⁾は中年期の世代性として子育ての再考、次世代の成長と自己との同一視等を挙げた。クライシス経験者では子の結婚を子の発達や親としての自分を評価する機会と見なしたり、親役割の変容を認識したと考えられる。

一方、クライシスを経験しない者も約50%見られた。彼らは子の独立を歓迎して子離れに円滑であったり、家族よりも仕事を基軸とした生活のために子の結婚を重視しない姿勢がうかがえた。家族生活は職業生活と影響し合いながら進行しており、これらの相互関係について、今後検討することが必要とされる。

4) 孫の誕生

孫の誕生でクライシス未経験者は40名中25名であり、純粋に誕生を喜んだり特別な感慨のない者が多かった。Neugarten & Weinstein(1964)⁵¹⁾は形式的、相互楽しみの、親代わりの、家族の知恵袋的、傍観者の、という5つの祖父母タイプを見出した。高齢者の対人関係、趣味、地域活動、ライフ・スタイルが、祖父母役割や孫誕生の認知に影響すると考えられる。

一方、クライシス経験者では世代継承の認識が見られた。孫の姿を通して過去(先祖)からの継承感覚及

び、未来（死後）への家族の継承感覚を促す“世代継承性促進機能”（田畑・星野・佐藤・坪井・橋本・遠藤，1996）³⁴⁾の表れであると考えられる。また、子育てとの参照では孫の姿から人生回顧を促される“時間的展望促進機能”（田畑・星野・佐藤・坪井・橋本・遠藤，1996）³⁴⁾がうかがえた。合わせて、成人後期に携り難かった育児を孫に対して行うことによって“過去への再関与”（Kivnick, 1982, 1983, 1986）³⁰⁾³¹⁾³²⁾が示唆された。生殖性という発達課題は成人後期と同一ではないが、老年期にアレンジされた形で提示され、現在の自己と対象との関係構築や経験の意味づけを通して、過去が再解釈され、自己の歴史に統合されると考えられる。

ところで、祖父母になることは一義的に歓迎されるものでなく、多様な葛藤も産み出すことも見出された。本対象者は孫誕生時の平均年齢は56.5歳であり、定年退職後も積極的に社会的活動を継続する者が多かった。こうした中高年にとっては、加齢や死に直面させる祖父母役割はアンビバレントを伴うと推察される。また、人生回顧や未来展望が円滑でない場合には、孫の誕生で明確に年長世代に位置づけられ、世代の更新を認識することに否定的な感情を伴うと考えられる。

さらに、孫と祖父母の関係には性別、居住形態、中間世代（成人期の子）との関係等が関連するとともに（Roberto, 1990, Kivett, 1991, et, al.），河合・下仲・中里・石原・権藤（1998）⁵²⁾は孫の親族関係での位置も影響することを示唆した。本研究でも内孫と外孫の区別や、2組の祖父母で孫をめぐる競争意識等、拡大家族との葛藤が認められた。

2. 家族生活の過程に関する検討

家族生活過程の分析ではクライシスの認識によりタイプが見出され、自覚型、中庸型、形成重視型、再編重視型の順に多かった。武内（1998）⁵³⁾は親の欲求として①自分の人生への関与と、②子どもの人生への関与に関するバランスを子育てへの関連要因として挙げ、①②の統合の様態が個人差の一因になるという。子育てや親であることの吟味が求められ、家族との関係を生きる意志や能力が問われる。自覚型は結婚、子の誕生という家族形成期及び、子の結婚という家族再編期の双方でクライシスを経験した。彼らは家族生活を重視し、それぞれのイベントで自身の人生に意味づけたり、家族の移行を解釈したと考えられる。

一方で、クライシスを経験しない中庸型も認められ、彼らは家族生活への関心に比重が低いと思われる。また、第二次世界大戦から経済復興へという時代的背景及び、伝統的な性役割観も中庸型の多さに影響すると推測される。20世紀末に65歳から70歳代の高齢者にとっては、家族イベントでの模索を経験せず、むしろ社会情勢や家族外の出来事に関心を向けたまま、老年期を迎えた者も一定数存在すると考えられる。

次に各型と孫の誕生との関連を検討した結果、クライシスなしは形成重視型と中庸型で多かった。形成重視型は家族形成期を強調し、子どもの発達に伴う家族生活に対する関心の低さがうかがえる。

古澤（1997）⁵⁴⁾によれば、親になることは子だけでなく配偶者や家族をはじめ周囲の人々のかかわりや、自身の親子関係も含めた対人関係の総和をもとに成立するという。今後は老年後期に焦点をあて、定年退職後の夫婦関係、配偶者との死別を取り上げるとともに、個人の生涯発達過程を継続的に検討する必要がある。また、家族イベントと心理的適応（蘭牟田・下仲・中里・河合・佐藤・石原・権藤，1996）⁵⁵⁾や、人生の満足度との関連を明らかにすることが望まれる。

付 記

本研究は日本心理学会第61回大会での発表（1997）を加筆、修正したものである。本論文に際して田畑治教授、梶田正巳教授、村上隆教授（以上、名古屋大学教育学部）より貴重なご助言を賜りましたことに深謝致します。また、稲葉良子氏（元名古屋大学教育学研究科）には面接の評定にお力添えを頂き、厚く謝意を表します。最後になりましたが、調査にご協力頂いた対象者の皆様及び名古屋市高年大学鯉城学園、名古屋市生涯教育センターの先生方にお礼申し上げます。

なお、本研究は平成8年度大幸財団学芸奨励助成を受けて行われた。

引用文献

- 1) 森岡清美・塩原勉・本間康平編：新社会学辞典，有斐閣，東京，1993.
- 2) 厚生省：平成10年度厚生白書，厚生省大臣官房政，策課調査室，東京，1998.
- 3) O'rand, A.M. & Krecker, M.L.: Concepts of the life cycle: Their history, meanings, and uses in the social sciences. Annual Review of Sociology, 16, 241-262, 1990.
- 4) 森岡清美：ライフサイクル，森岡清美・望月嵩新しい家族社会学・三訂版，培風館，東京，P. 66-78, 1993.
- 5) Rowntree, B.S.: Poverty: A study of town life. London: Macmillan, 1901.
- 6) Sorokin, P.A., Zimmerman, C.C., & Galpin, C.J.: A systematic sourcebook in rural sociology. Vol.2. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1931.
- 7) Hill, R.: Family development in three generations. Cambridge, Mass; Schenkman, 1970.
- 8) 森岡清美：家族周期論，培風館，東京，1973.
- 9) 森岡清美：現代家族のライフサイクル，培風館，東京，1977.
- 10) 前原澄子：母子・家族・社会と看護，前原澄子・野田美和子編，図説新臨床看護学全書－母子・乳児の健康と看護(1)，健康な次代の育成のために－，同朋舎，東京，P.11-51，1996.
- 11) 望月嵩：現代家族の生と死，望月嵩・木村汎編，現代家族の危機，有斐閣，東京，P.2-22，1980.
- 12) Lewis, R.A.: A longitudinal test of a developmental framework for premarital dyadic formation. Journal of Marriage and the Family, 35, 16-25, 1973.
- 13) Adams, B.N.: Mate selection in the United States: A theoretical summarization, In Burr, W.R., Hill, R.N., Nye, F.I., & Reiss, I.L. (Eds.) Contemporary Theories about the Family, Vol.1, New York: The Free Press, P.259-267, 1979.
- 14) 古畑和孝：好きと嫌いの人間関係－魅力と愛の心理学－，有斐閣，東京，1993.
- 15) Reedy, M.N., Birren, J.E., & Schiae, K.W.: Age and sex differences in satisfying love relationships across the adult life span: Human Development, 24, 52-66, 1981.
- 16) 氏家達夫：親になるプロセス，金子書房，東京，1996.
- 17) 門野里栄子：夫婦間の話し合いと夫婦関係満足度，家族社会学研究，7，57-67，1995.
- 18) 藤原武弘・石井眞治・黒田耕誠・春日チヌヨ：21世紀に向けての女性に関する市民意識調査，広島市民生局，広島，1986.
- 19) 藤原武弘：結婚生活に伴う移行，山本多喜司・ワップナー，S. 編，人生移行の発達心理学，北大路書房，京都，P.223-242，1992.
- 20) Berry, R.E. & Williams, F.L.: Assessing the relationship between quality of life and marital and income satisfaction: A path analytic approach. Journal of Marriage and the Family, 49, 107-116, 1987.
- 21) 平石賢二：青年期の異世代関係－相互性の視点から－，無藤隆・麻生武・内田伸子・落合良行・楠見孝・南博文・やまだようこ編，講座生涯発達心理学4－自己への問い直し、青年期－，金子書房，東京，P.125-154，1995.
- 22) Neugarten, B.L.: Adaptation and the life cycle. Counseling Psychologist, 6, 16-20, 1976.
- 23) Lewis, R.A.: The adult child and older parents. In Brubaker, T.H. (Ed.), Family relationships in Later life. California: Sage Publications Inc. P. 68-85, 1990.
- 24) 前田信彦・目黒依子：都市家族のソーシャル・ネットワーク・パターン－社会階層間の比較分析－，家族社会学研究，2，81-93，1990.
- 25) 三谷鉄夫：都市における親子同・別居と親族関係の日本的特質，家族社会学研究，3，41-49，1991.
- 26) 宇都宮博・岡本祐子：高齢期における夫婦アイデンティティと夫婦適応の検討，鑪幹八郎・一丸藤太郎・岡本祐子・児玉憲一・一円禎紀・森田祐司，ライフサイクルにおけるアイデンティティの再編過程に関する研究，文部省科学研究一般研究（B）

- 平成5年, 6年, 7年度における研究報告書(非
 公刊), 1996.
- 27) Roberto, K.A.: Grandparent and grandchild
 relationships. In Brubaker, T.H. (Ed.),
Family relationships in late life. California:
 Sage Publications Inc., P.100-112, 1990.
- 28) Kivett, V.R.: The Grandparent-grandchild
 connection, Marriage and Family Review,
 16 (3-4), 267-290, 1991.
- 29) 詫摩武俊: これからの老い-老化の心理学-, 講
 談社, 東京, 1991.
- 30) Kivnick, H.Q.: Grandparenthood: An overview
 of meaning and mental health. The
Gerontologist, 22, 59-66, 1982.
- 31) Kivnick, H.Q.: Dimensions of grandparenthood
 meaning: Deductive conceptualization and
 empirical derivation, Journal of Personality
and Social Psychology, 44, 1056-1068,
 1983.
- 32) Kivnick, H.Q.: Grandparenthood and a life
 cycle, Journal of Geriatric Psychiatry, 19,
 39-55, 1986.
- 33) Kahana, B. & Kahana, E.: Grandparenthood
 from the perspectives of the developing
 grandchild. Developmental Psychology, 3,
 98-105, 1970.
- 34) 田畑治・星野和実・佐藤朗子・坪井さとみ・橋本剛・
 遠藤英俊: 青年期における孫・祖父母関係評価尺
 度の作成, 心理学研究, 67(5), 375-381, 1996.
- 35) 亀口憲治: 家族療法から見た祖父母の役割, 心理
 臨床, 7(4), 205-210, 1994.
- 36) 河合千恵子: 老人の近親死反応, 松井豊編,
 悲嘆の心理, サイエンス社, 東京, P.137-167,
 1997.
- 37) Kahn, R.L. & Antonucci, T.C.: Convoys
 over the life course: Attachment, roles and
 social support. In Baltes, P.B. & Brim, O.G.
 (Eds.), Life-span development and behavior,
Vol.3, New York: Academic Press, P.253-286,
 1980, 東洋・柏木恵子・高橋恵子監訳, 生涯に渡
 る「コンボイ」-愛着・役割・社会的支え-,
 生涯発達の心理学2, 新曜社, 東京, P.33-70,
 1993.
- 38) Messeri, P., Silverstein, M., & Litwak, E.:
 Choosing optimal support groups: A review
 and reformulation. Journal of Health and
Social Behavior, 34(2), 122-137, 1993.
- 39) Krause, N.: Negative interaction and satisfaction
 with social support among older adults.
Journal of Gerontology: Psychological Sciences,
 50B(2), 59-73, 1995.
- 40) 岡林秀樹・杉澤秀博・矢富直美・中谷陽明・高梨
 薫・深谷太郎・柴田博: 配偶者との死別が高齢者
 の健康に及ぼす影響と社会的支援の緩衝効果, 心
 理学研究, 68(3), 147-154, 1997.
- 41) Hill, R. & Mattessich, P.: Family development
 theory and life-span development. In
 Baltes, P.B. & Brim, O.G. (Eds.), Life-span
development and behavior, Vol.2, New
 York: Academic Press, P.161-202, 1979,
 東洋・柏木恵子・高橋恵子監訳 生涯発達の心理
 学3-家族・社会-, 新曜社, 東京, P.97-138,
 1993.
- 42) Elder, G.H.: Children of the great depression:
Social change in life experience. Chicago:
 The University of Chicago Press, 1974,
 本田時雄・川浦康至・伊藤裕子・池田政子・田代
 俊子訳 大恐慌の子どもたち-社会変動と人間発
 達-, 明石書店, 東京, 1986.
- 43) Erikson, E.H.: Childhood and society, New
 York: W.W.Norton & Company, 1950, 仁科
 弥生訳, 幼児期と社会1, 2, みすず書房, 東京,
 1977, 1980.
- 44) Erikson, E.H.: Insight and responsibility,
 New York: W.W.Norton & Company, 1964,
 鑪幹八郎訳, 洞察と責任, 誠信書房, 東京,
 1971.
- 45) 岡本祐子: 成人期における自我同一性の発達過程
 とその要因に関する研究, 風間書房, 東京, 1994.
- 46) 堀内和美: 中年期女性が報告する自我同一性の変
 化-専業主婦、看護婦、小・中学校教師の比較-,
 教育心理学研究, 41, 11-21, 1993.
- 47) 大友由紀子: 農村直系制家族における配偶者選択
 と結婚の世代的変化-長期反復調査データからの

- 世代間比較一，家族社会学研究，6，53-64，1994.
- 48) 柏木恵子・若松素子：「親になる」ことによる人格発達一生涯発達の視点から親を研究する試み一，発達心理学研究，5(1)，72-83，1994.
- 49) 小野寺敦子・青木紀久代・小山真弓：父親になる意識の形成過程，発達心理学研究，9(2)，121-130，1998.
- 50) 大日向雅美：母性の研究，川島書店，東京，1988.
- 51) Neugarten, B.L. & Weinstein, K.K.: The changing American grandparent, In Neugarten, B.L. (Ed.), Middle age and aging, Chicago: The University of Chicago Press, P.280-285, 1964.
- 52) 河合千恵子・下仲順子・中里克治・石原治・権藤恭之：孫の誕生とその心理的影響，老年社会科学，20(1)，32-41，1998.
- 53) 武内珠美：親子関係と共生一子どもを育てることと親の側の発達一，岡本祐子・平田道憲・岩重博文編，人間生活学一生活における共生の理念と実践一，北大路書房，京都，P.40-63，1998.
- 54) 古澤頼雄：子育てによる親育ち，母子保健情報，36，14-17，1997.
- 55) 藺牟田洋美・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・石原治・権藤恭之：中高年期におけるライフイベントの主観的評価・予測性と心理的適応との関連一家族関係と職業ライフイベントを中心にして一，老年社会科学，18(1)，63-73，1996.